

道元の父としての『法華経』

駒澤大学名誉教授 石井公成

道元は曹洞宗を開いたとされるものの、「禪宗」「禪師」「曹洞宗」などといった言い方を好まず、釈尊以来の「正伝」の仏法を守ろうとしていたことは良く知られています。では、その釈尊とは、どんな仏だったのか。簡単に言ってしまうと、坐禅によつて悟り、『法華経』を説いた釈尊ですね。道元は釈尊と『法華経』を一体視していたようで、『法華経』を父と仰いでいたのです。

『法華経』を父とみなすというのはおかしいようですが、アメリカの仏教学者、アラン・コールは、『法華経』を代表とする初期大乘経典は父と子の再会をテーマとしているものが多いとして、二〇〇五年に「Text as Father: Paternal Seductions in Early Mahayana Buddhist Literature (父としてのテキスト…初期大乘仏教文献における父性の誘惑)」と題する本を書いており、高く評価されています。

『法華経』の場合、信解品で説かれている長者窮子の譬喩では、きわめて富裕な長者である父のもとを離れた子が、諸国を流浪した末、落ちぶれた姿になって育った都市に戻って来ます。息子に莫大な財産を譲りたいと思いつつ、行方不明となっているため諦めた父は、大邸宅を建てて暮らしていましたが、邸宅の前を通りすぎる息子に気づき、使用人に呼びにいかせました。すると、貧乏根性がしみこんでいた息子は、捉えられて殺されてしまうと怯え、気絶してしまいます。そこで長者は、とびきり貧相な使用人たちをつかわして息子にこの邸宅で働くよう誘わせ、最下層の仕事から始めさせます。そのうえで、自らもやつれた身なりで近づき、我が子扱いして親しくなり、少しづつ重要な仕事をさせるようにしていきます。そして、財産の管理も任せるに至ったところで、国王・大臣を初めとする多くの人々を集め、実の息子であることを宣言し、すべての財産を譲ったのです。

むろん、長者は釈尊、息子は仏をめざさない小乗仏教の徒の譬喩であって、財産は仏知見、つまり、仏の悟りの智慧を象徴しています。釈尊はすべての人に、自分と同じ悟りの智慧を得させようとしたのですが、人々は自分にはそんな

ことは無理だとして受け付けなため、方便を用いて少しづつ教化した上で、最後に、釈尊の様々な教えはすべて人々を仏の悟りへと導くものであったことを明かしたとするのが『法華経』です。

この『法華経』は、若き道元が学んだ比叡山の宗派である天台宗では最も尊重されていた経典であつて、道元は比叡山を離れた後も『法華経』を至高の経典としていました。亡くなる少し前には、『法華教』神力品の偈を唱えています。道元の著作に見える経典や禅籍を調査した鏡島元隆先生の『道元禅師の引用経典・語録の研究』（木耳社、一九六五年）によれば、圧倒的に多く引用されているのは、禅の語録などでなく、『法華経』なのです。『法華経』の引用は五十一箇所に及んでおり、二十八品のうち十六品から引用するなど、『法華経』全体から幅広く引いているうえ、文や句でなく、ちよつとした言葉を用いている場合、少し表現を変えて用いている場合は、これよりはるかに多いのです。

その数多い『法華経』の引用の中で注目すべきなのが、譬喩品で説かれる「今、此の三界は、皆な是れ我が有、其の中の衆生は、悉く是れ吾子なり」とある部分です。『正法眼蔵』の「三界唯心」の巻では、「釈迦大師」の言葉としてこの句を引用し、「吾子」という語を何度も何度も使つて『法華経』のこの言葉の意義を説いています。つまり、道元自身、釈尊の「吾子」であることを強調しているのです。

ここで思い出されるのは、鎌倉仏教の祖師は、早くに親を亡くした人物が多いことです。法然は、九才の時に、武士であつた父が殺されるところを目の前で見えています。その法然を批判した明恵は、同じく九才で両親を失いました。道元も、早くに母を亡くしており、父が誰であるかについては異説がありますが、父ではなく、「育父」に育てられています。その道元は、入宋して各地をめぐるものの中国の禅僧に不満をいだいていたところ、坐禅を何より尊重する昔風で一徹な天童如浄にめぐりあい、付法されて一生の間、崇敬し続けます。最初にその如浄に挨拶し、法を問うことの許可を願つた際、如浄は、「今より後、昼夜にかかわらず、袈裟をつけてでもつけなくても質問してよい。わしは、子供が無礼にふるまつても父親が許すのと全く同じに扱おう」と答えています。お前に対して父親のように接しようというのです。この言葉、また以後の親切な指導に対して、道元がどれほど感激したかが推測されますね。

つまり、『法華経』において「この世界のすべての命あるものは吾が子だ」と語っている釈尊は、坐禅によつて悟り、以後、

教化に努めて『法華経』を説いたのであり、釈尊、『法華経』、そして如浄は、「父」ということで見事につながるのです。晩年になって病の中で道元が最後に書いた「八大人覚」の巻は、このうえなく有り難いことに仏法にめぐりあうことができた以上、それに従って修行して無上菩提に至り、「衆生のためにこれを説かんこと、釈迦牟尼仏に等しくして異なることなからん」という誓いの言葉で結ばれています。

この言葉が示すように、道元は晩年になればなるほど、釈尊との一体化志向が増しているように見受けられます。その道元が坐禅を強調しつつ、「禅宗」「禅師」という言葉を嫌い、經典を軽んじる宋代の禅僧たちを嫌った背景には、坐禅によって悟り、「父」として『法華経』を説いた釈尊、父なる存在としての『法華経』があつたのではないか、というのが私の推察です。